

『昨日 (10/19)』

昨日の夢懐かしい私のゆめ
両親に手を握られて歩いたあの日々
泣いて私を叱った母のあの顔

昨日までであった過ぎ去りし私の日々
雨に打たれた確かにあった日々
雪に途方にくれた過ぎ去りし日々
春の陽に夢を見た懐かしい私の日々

いま私は思い出し浮かべている
私の日々を確かにあった日々を
もう戻らぬ日々を昨日の日々を

『すべて (10/24)』

あなたが去ったあと私は愛を失った
あなたが手に入れたすべての物は
私があるあなたにあなたも
それなのにあなたは去って行った
でも一つだけ忘れていた
私のすべてを奪っていかなくなった

残された私愛を失った私

私の唇を心を両腕をあなたは奪い去り
残された私はどうやって
失った両腕を心を唇を戻せばいいの？
いまはあふれる涙が私の友達
いまはあふれる涙が私の友達
ごかいしないでわたくしのこの涙は
どうして？ 私まで奪って
去って行かなかったのだろうか

ごかいしないで
私が流しているこの泪は
あなたへの涙ではないの
この私自身への泪でもないの
そう明日への涙なのよ
もうあなたの噂もあなたとの喜びも
もうあなたへの苦しみも
明日からはないのだから

『月に心 (10/28)』

あああ今宵も月の光が
窓辺に差し込んで

私の心を苦しめるように
お月様はこの心を知っているのかしら
そして私は今夜もひとり泣くのだけ

私の胸があなたを
抱きたがって切ないのに
あなたたった今宵も
私を待たせるのね。
どうせほかの人と
手をつないで街を散歩し
楽しいおもいをしてるのでしょ
あなたを愛している私を
ひとり寂しくさしてね
私がほかの誰よりも
あなたを深く愛しているのに
あなたはそれを知っている
なのに私をひとり濡らさせて
あなたはほかの人といちゃついている
ひきょうよそう思わないの。
でもいいの
私のところへ戻ってきてくれさえすれば
だって身も心もあなたへ
愛焦がれているんですもの
判って欲しいの戻ってきて
私をおもいきり抱いて
私の胸も唇も奪いさって

だって私は待っているんだから
あなたにそうされることを
戻ってきて欲しいの
月夜に独りにさせないで

『言わないで (10/29)』

言わないで黙って
他の人のことなど
言わないでだって
帰ってきてくれただけで
私は嬉しいのだから

さあシャワーを浴びて
他人との事を流していらしやい
そして私を抱いて
言わないで聞かせないで
他人と有った事など私はいいの
貴方が側にいるだけで
私は生きられるのもういいの
他人の事など言わないで
さあ私をおもいっきり抱いて
私はこの時を待っていたのだから
私のすべてを

悦びも悲しみも苦しみも
奪って欲しいの
貴方を愛してしまったのだから
言わないで他人と有ったことなど
黙って言わないで

言わないで黙って
他の人のことなど
言わないでだって
貴方を愛しているのだから
そんな事はどうでもいいの

『二十世紀 (10/30)』

これからの社会はどうして
仮面を着けて生きるのでしょうか
己の本性を見せまいと隠し
人はその仮面で人を見る
仮面仮面仮面仮面仮面
その人ってどんな地位にいるの？
その人ってどんな職業なの？
この答で人生がきまってしまう
例えば
彼は経済連のトップですよ

だから彼が言い放った
基地の少女が受けた傷を
これで日米が損なわれてはいけないと
トップと言う価値が物いう
頂点に立つ天皇から
勲章を授かって賞賛される

仮面社会では人は
心のことを言うのはタブーであり
己を見せるのもタブーです
少女が強権に虐げられても
我々の利益が損なわれないことが大事
と言う財界の人へ
間違っているそんな考えは恥だ！
言うものなら一生をぼうにふる
さーて問題が起きた
(人間)の権利に目覚めた基地の人々へ
村山(首相)も河野(大臣)も
手を打たなくてはならなくなつた
理念も信念もなく政権が欲しい軍団
政権にぶら下がるのに汗をかき
人々の幸福に汗を流すのではなくてね
政権システムの維持に汗をかき
仮面が謳歌する世の中なのです

基地の少女が受けた傷は
(神国) 侵入軍は各地でおこなっていた
でもその責任を取らずに
侵略そのものまでが正しいと
仮面が社会に映りだす
だってほっら
幼児の間で 苛めが巾をきかすでしょう
仮面をつけないと生きられないのです
これからは 仮面の世界なのです
仮面の世界では どんなお金であれ
お金が物を言う世界ですので
仮面とお金が踊る世界ですよ

大人社会は 仮面舞踊界でも
そつりやー生きていきますよ
でも……ね
子供たちは 大人でないのです
うまく踊り立ち回れないですよ

End all 1995/10

『踊り (11/01)』

風が音を発して吹いています
青い空に白い雲が夕日を映えています
路には落葉が踊り走り回っています
北風が大地を吹きまくり
夕陽の中で人は心を閉じはじめます

カラカラカラ……………

落葉が足元を走っている
風に吹かれて踊っている
私の心にあつた悦びは
縮んでしまった
今は独り寂しく歩いている
昨日までの夢を覚まされ
寒さの前に気がつく
着る服さえもない
食べる糧さえもない
北風に吹かれて落葉が
走って行く踊っている

樹の枝が風に揺れてしなり
北風は吹き通って行く
夢にさよならをし

人の温もりへと帰る時が
もうそこに見せている
落葉が路を走っていく
でも私の戻る所はない
夏の日々の夢が
黄昏となって沈んでいく
なになに一つ咲くことのなかった
想いでが

『陽 (11/10)』

十一月の陽は
温かくて光っているのですね
なにもかも忘れさせるように
優しく包んで
ふっと生きることが嫌になるんです
生きて何になるのかってね
この宇宙でたった
一人だって言うことがね
孤独とは違うんです
どんなに人と温もっていても
星空を見ていると
一人！ だって知るのでしょ
それが堪らないのです
なんの為に生命を授かり
私は何のため死んで行くのか

生きるって
耐えることなのでしょかね
私は一人だ！
この無限の中で一人なのだ

『眩き (11/20)』

人はどのみち
独りなのですから
自分を愛し
他人を認め
それで生きを
歩いていければ
理想じゃないですか

心の眩きを
人に見せるために
有るのではない
ただ生きた証拠が
有ればよい
それだけでよい
それだって忘れられるが

『離れ (11/20)』

男の流す涙を
女は優しく受けとめ
私を抱いて
母のように包んでくれる
男は幾つになっても
子供ですの
女の乳を吸いながら
見果てぬ夢を
追い求めるのです
でも男は知っている
女と別れる日を
なぜって？
男は母からは
いつだって
独立していくのですから

『懐れ (11/20)』

世間を知った女は
男を餌にし
世間を知った男は
女の力を知る
それはそれで良いのですが
いつかのつぴきならなくなり

男も女も

刃物の日々となる
互いに刺し合ったまま
死んでしまえばよいが
世の中そんな
甘くはなかった
生き残った
男の道も地獄なら
生き残った
女の道も地獄です
今度こそやり損なわず
殺し合おう
永遠に目を瞑るため
二度と眼を開かないため

『夜叉 (11/20)』

愛しているのなら
殺せるのか
憎んでいるのなら
殺せるのか
私のこの命を
みごと散らせることが
出来るのか
何時でも良いよ
私を刺してごらん

私がどうするか

私もそれを知りたい
むしろ夜叉になって
おまえが狂う方が
私は怖い
狂ったお前を
抱き締め愛撫する
おのが心が怖い
狂ったお前の愛撫が
心に染み込む方が
私は怖い
愛しているのなら
殺せるのか
憎んでいるのなら
殺せるのか
私のこの命を
みごと散らせて欲しい

『しあわせ (11/20)』

しあわせを逃がした
おとこは何処へ行く
しあわせを掴み損ねた
おんなは何処へ行く
一家団欒の窓明かりを
眩しく眺めているだけ

落ち葉が足元にまとわりつき
行く場所も無い戸惑いを
風に流す
捨て場がない寒い生き

踏み違えた道を
屋台の酒で紛らわせ
茶碗酒に月が映っている
酔えた匂いの中で
無かったしあわせの夢に
微睡眠
束の間の温もりに浸る

幸せを掴み損ねた
男は死に場所を求め
幸せを逃がした
女も死に場所を求め
死に切れずに生きて
他人の幸福をただ眺め
身に吹く冬の風へ
そうであったしあわせを
かすかに夢に炊き
木枯らしに消されていく

『鮮血 (11/22)』

紅の月が女の手を
真っ赤に染めさせるなら
男はどうすればよい
ただ見ているだけか
いやなさせるままか

それもよいだろう

月が明かりに光る
刃物が冷たき輝きを見るのも

ただ唯一心配なのは
女が間違はなく
俺を殺してくれるかである
やり損なって
生きることは嫌だ！

死に切れない己の
姿を見るのも嫌だ

紅の月が雲に隠れ
女の手が鮮血に舞ったとき
死に切れないことを恐れて
鮮血の手を握ったまま
己を殺し続けるだろう

『涙 (11/30)』

女の涙が月夜に光り
男は生きる力を
無くし始める

息きが絶えたのなら
二人とも
永遠の幸せを
掴むというのだろうか
死んだら
花が咲くというのか
生きて咲くことのない花を
無言の死体となれば
咲くというのか

男の安堵の顔を
月の明が照らしている
女の衣装化粧も照らされて

息せぬ二人の道行きを
月の明かりが照らしている
生きて掴みたかった幸せか
寒夜に吹き来る冷え風が
男と女の
咲かなかった花を
吹き去って
漆黒闇へと消えて行く
祈りの闇へと去ってい

End all 1995/11

『寒い日 (12/10)』

空に黒雲が筋走り
冷たい風が
地上を吹き荒れていく
マフラーを巻いた
コートの際を
しっかりと手で閉じ
一人道を行く

田の畦道には
吹きすさび風を防ぐ
物とて無し
柿の枝は狂わんばかりに
震え音を切り
杉の小枝が激しく
風に波打っている
遠く堤の道に人影もなく
空は風の発てる音のみで
飛ぶ鳥もない

情熱は縮こまり
無法が空を行く
否 否 否

この世の汚物をすべて
吹きさらうために
母が差し出した愛の行為か
この社会をすべて
清くするため
吹きまくっている風かも
ただそう願いたい

『谷 (12/18)』

深い谷底へ
落ちて行く落ちて行く
落ちて行く落ちて行く
落ちて行く落ちて行く
落ちて行く落ちて行く

いったい何処まで
落ちて行くのだろうか

落ちて行く落ちて行く
落ちて行く落ちて行く

落ちて行く落ちて行く

いったい何処まで
落ちて行くのだろうか

落ちて行く落ちて行く
落ちて行く落ちて行く
落ちて行く落ちて行く

深い谷底へ
落ちて行く落ちて行く

落ちて行く落ちて行く
落ちて行く落ちて行く
落ちて行く落ちて行く

『傷 (12/19)』

語ることをしない
傷が有るから

私は生きています

口を結んだ
己が心の悲しみを
谷底へと沈ませて
だから人よりも
私は生きています
心の痛みは更に
深く深くへと沈んで行く
だからなおさら
私は生きています
人に語れぬ傷が有るから
私は生きていける

語ることをしない
傷が有るから
私は生きています

『泣き (12/24)』

他人が耐えている
苦しみの長きに

心は震え私は泣いている

為すすべが無いのです
自分が黙々と生きるように
かの人も戦の
明け暮れなのでしよう
平和を願いながら
人は皆自分の人生と戦って
生きています

他人が耐えている
苦しみの長きに
心は震え私は泣いている

『苦響 (12/31)』

あの鐘の音は
人生の苦響の音色
人に語れぬ苦しさを
昇華しようとする
心の苦悶の音色

疲れ果てて何時しか
ペンを執って

詩を書いている
看護する父へ
確かな感謝が湧きおこり
父の無体を濾過する
りりあんさんは
詩の力を掴み
心に美しく響かせる
でも苦しみは終わらない
無体になった父を
殺すかしないうちは
苦しみは際限もない
いやいっそ自分も
父の様になつてしまえば
済むことか

あの鐘の音は
人生の苦響が音色
人に語れぬ苦しさを
昇華しようとする
心の苦悶が音色

『鐘の音 (12/31)』

一つゴ〜ンと鳴りました
深夜の町へ透っていきます
御寺の梵鐘が響き
お坊さんがまた打ちました
二つゴ〜ンと鳴り響き
冷えた夜空の星々へと
鐘の音色が消えていきます

新たまの年へと透る祈り人

通っている
念仏の合唱が御寺にあふれ
蠟燭の炎が風に揺れている
妙法を呼ぶがごとく
人の苦しみへ供養が続く

三つゴ〜ンと鳴りました
深夜の町へ透っていきます
御寺の梵鐘が響き
お坊さんがまた打ちました
四つゴ〜ンと鳴り響き

冷えた夜空の星々へと
鐘の音(ね)は消えていきます

永遠に続く道へ
人は荷物を背負って
途方に暮れる
御寺の梵鐘が響き
念仏の合唱が響く
妙法を導くがごとく
人の淋しさへ供養は続く

五つゴ〜ンと鳴りました
深夜の町へ透っていきます
御寺の梵鐘が響き
お坊さんがまた打ちました
六つゴ〜ンと鳴り響き
冷えた夜空の星々へと
鐘の音色が消えていきます

End all 1995/12